

# 呼吸器に消毒液、患者死亡

## 京大病院 蒸留水と誤認

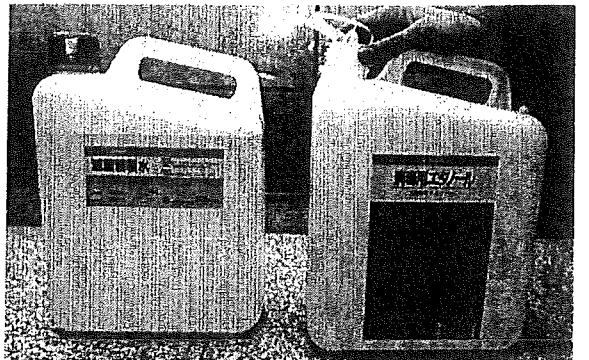
京都市左京区で今年二月末から三月初めにかけて、患者に装着した人工呼吸器の加湿器に、誤って蒸留水の代わりにより消毒用エタノールを注入し、患者がエタノール中毒で死んでいたことがわかった。本田孔士院長ら病院関係者が七日、記者会見で明らかにした。届け出を受けた川端署は、医療ミスによる業務上過失致死事件とみて、病院関係者から事情を聴いている。

亡くなったのは脳神経系の病気で入院していた十七歳の女性。入院を繰り返して二月下旬から危篤状態だった。

病院側の説明によると、今月一日午後十一時ごろ、看護婦が、人工呼吸器に付いている加湿器に注入する蒸留水を取ろうと、ベッドの下にタンクを見たところ、中に消毒用エタノールが入っているのに気付いた。女性患者は発熱などの感染症の症状が悪化しており、病院側は抗生物質の投与などを処置したが、急性アルコール中毒に対する治療はせず、二日午後八時に死亡した。川端署が司法解剖した結果、死因はエタノール中毒と判明した。

同病院と川端署の調べでは、この患者のベッドの下には通常、加湿器に注入する蒸留水を入れたプラスチックのタンク（四リ入り）が置かれていた。複数の看護婦が交代で一日に十回前後、注射器を使って数十ccずつを加湿器に移す作業をしていた。二月二十八日午後六時ごろ、二十代の看護婦が空になったタンクを別のタンクと交換した際、誤ってエタノール入りのタンクを置いてしまった可能性が高いという。

病院側が気付くまでに五十三時間にわたって三十三回、計六百七十七ccのエタノールが加湿器に注入され、吸引されていたとみられる。



取り違えたものと同種のタンク=7日午後9時20分、京都市左京区の京大病院で

エタノールが加湿器に注入され、吸引されていたとみられる。

タンクは白色で、蒸留水

院の本田院長は、動揺を隠しきれない様子で、医療ミスの可能性を認めて謝罪した。

病院側は今日三日、主治医と看護婦長が亡くなった女性の遺族を訪ねて、経過を報告し、謝ったという。処分などについてはまだ決めておらず、本田院長は「容赦の取り違えが事故の原因ではないか」とみて警察へ届け出たが、司法の判断を待つて対処したい、と慎重に語った。

京大病院側では一九九八年二月、舌がん手術のため入院していた血液型が

は四リ入り、エタノールは五リ入り。それぞれ「滅菌精製水」「消毒用エタノール」のラベルが張ってある。しかし、看護婦らはラベルやアルコール臭などには気づかなかつたという。また、ETANOLのタンクも病棟の薬品庫に置かれていたが、使用に際して記録簿などの記入はしていなかった。

発覚後、同病院の医療問題対策委員会が中心となって再発防止を検討。蒸留水と消毒用エタノールのタンクが似ていたことが取り違えの原因だとみて、蒸留水を五百cc入りの容器に変えるなどした。

京大病院人工呼吸器エタノール事件  
府警捜査／病院会見  
2000年3月8日 朝日新聞（大阪）

**病院長が謝罪  
防止策を検討**  
記者会見した京大病院